

まちのイメージとまち並み（景観）整備との関係についての研究

～イメージを反映させたまち並み景観整備に向けての試論～

A study on the relationship between the IMAGE and (landscape) design of a city

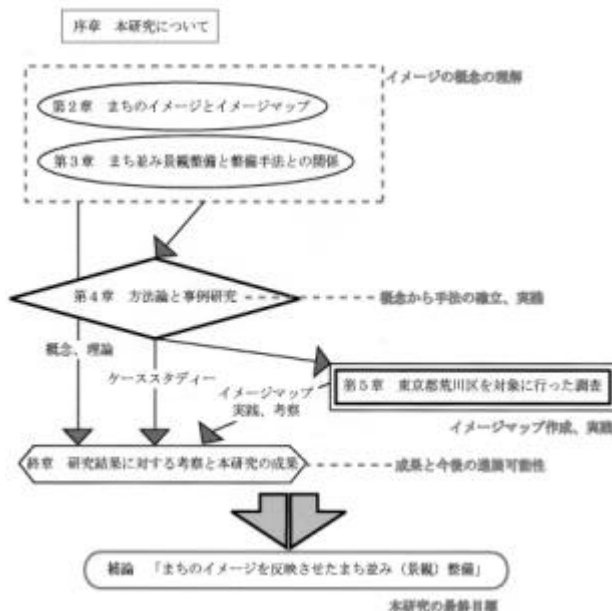
A trial for the design with the reflection of the IMAGE in

06141 宮本 裕太

There has, recently, been any movement for the city with the reflection of residents' opinions in, since 1992 when City Planning Law started to stipulate so. With this stream, it is getting more important for people living in the city to participate in the city planning, positively and mainly. In this point of view, this paper aims to make clear how those opinions reflect in the practical planning, regarding "opinion" or the (future) "vision" of the city as the **IMAGE** and **IMAGE map** drawn by city livings in their mind. First, it compares IMAGE maps with the (image) diagram of the city planning. Second, it reviews the two practical trials of the city planning with **IMAGE reflecting**. Then, by making IMAGE map actually through the enquête, it also seeks its possibility in various profiles.

研究の背景と目的

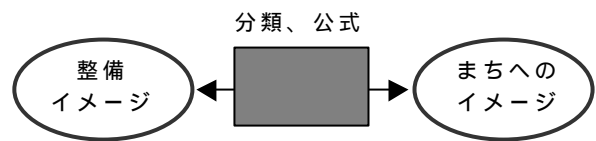
1992年、都市計画法改正により「住民意見の（都市マスへの）反映」が明文化された。それに伴い、実際にまちに生きる人々が、主体として自主的、積極的にまちづくりに携わることの重要性は、ますます大きくなってきている。そんな中で、彼らの持つまちに対する意見や、描く将来像を計画に取り入れるための様々な手法が考慮され、試行されている。しかし、それらがどのようにまちづくりに反映されているかについて、実際のところは明らかではない。そこで、まちに対する意見、将来像を、まちに対する“イメージ”という観点から捉え、この“イメージ”をまちづくりにどのように反映させていくことができるのか、また反映させるべきか、について考察し、提言することを本研究の主目的とする。



【図1】 本研究の概要

興味の原点

背景を踏まえ、研究当初の興味の対象は【模式図1】にあるような Black Box の解明にあった。つまり、計画者（プランナー）が持っている整備イメー



【模式図1】

ジと、住民やまちを訪れる人々（以下まち利用者）がまちに対して抱くイメージの間には、何らかの関係（矛盾、合致）が潜んでいるのではないかと、いう興味である。そこでまず、まちへのイメージ、ということと、そのイメージを表現（代弁）するものについて考える。

まちのイメージとイメージマップ

人がなにか活動を起こす際、記憶は場所と結びついて為される。そして、まち利用者にとってイメージが誘発されやすいまちとは“わかりやすさ”（= Legibility）を持ったまちである。また、まちの持つ、強いイメージを呼び起こさせる性質（= Imageability）も同様に、まちをイメージする際の重要な要素となる。このような、環境の持つ Legibility、Imageability とは人々に精神的、肉体的安定をもたらす、人間の体験に深さや密度を与えているものである。

イメージする側の人と、される側のまちは、このような性質によって相関している。そしてそれらはどちらか一方では無意味である。このような相互関係と、それによる両者の発展の相互作用にこそ、まちをイメージすることの本質はあると言えるであろう。

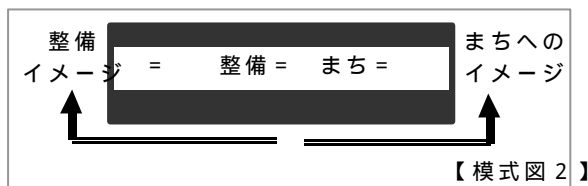
ところで、以上の概念を基に、まちのイメージを捉える媒体として考えられたものが、Kevin Lynch のイメージマップである。その手順は以下である。

市民の中から選出した少数にインタビューする訓練された観察者が現地を回り、心に描くイメージを系統的に検討する。そしてこれらから、都市の要素を分類、抽出し、各要素に対するイメージの強弱をマップ上に表現したものがイメージマップ¹となる。

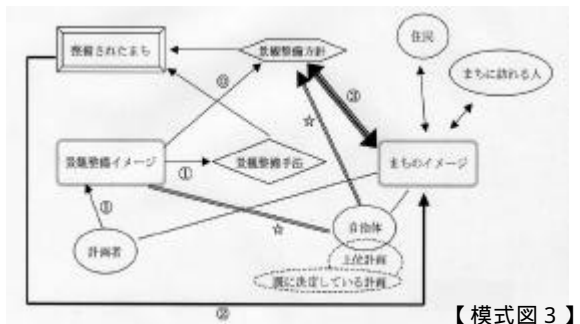
¹ Kevin Lynch はイメージマップとその手法について (a)どのくらい信用でき、どこまで事実として受け取れるか、(b)どの程度役に立つものか、と懐疑する一方で、その都市デザインに対する大きな寄与の可能性も強調する。

まち並み景観整備と整備手法との関係

Black Box について考えてみると、そこにはいくつかの段階が内包されている。



が本研究の興味である。の部分 を明らかにしているのが、既往研究『景観整備イメージと景観整備手法との関係についての研究』である。ここでは設計に至るまでの景観（思い描かれた整備）イメージの過程や（実際用いた）整備手法との関係についてまとめられ、整備イメージにより整備手法は高い頻度で決定する、という相関を考察している。そして、【模式図 2】における段階の相互、循環関係は以下になるだろう。



（図中の番号は【模式図 2】と対応。また便宜上分けているが本来、自治体は計画者に含まれる）

方法論と事例研究


以上を踏まえ、また Black Box を解明する目的のため、方法として以下を試みた。それは、まちのイメージをイメージマップに、整備イメージを整備方針図（マップ）にそれぞれ対応させた、両者の比較分析である。（整備方針図は、自治体によるものとしている）具体的には、両マップを重ね合せ、都市のイメージ要素、Paths、Edges、Districts、Nodes、Landmarks に着目、そこから見える合致や矛盾を指摘し、考察を加えるという作業である。本論では、ケーススタディーとして長岡市、甲府市、広島市、荒川区を取り上げているが、このうち特徴的だった、広島市と荒川区の例を挙げることにする。

広島市
両マップについての考察は以下の表にまとめられる。


イメージマップ	景観マスターデザイン
Paths ・山陽本線、国道 2 号線 平和大通も強い ・川の間道も意識 ・商店街沿いの道へのイメージも強い	・Paths 沿い施設への意識が高い ・各種 Path について詳細に描かれ、各々性格付けが見える

Edges ・南北に流れる川全てに強いイメージ ・マップ端の方が歪む	・川はやはり重要視 ・川沿いに緑を配し、Edge の整備
Districts ・平和公園や縮景園、市内の商店街も強い ・出島、宇品も強い	・平和公園等緑地が良く反映され、商店街、歓楽街も考慮される
Nodes ・各駅の他に、交差点の紙屋町が強い ・広島空港、広島港は特徴的	・駅は網羅されている ・交差点の特記は無い
Landmarks ・比治山への意識が最も強く、他の山も強い ・広島城、広島市民公園、原爆ドームも ・中心の商業施設郡単体がイメージされる	・比治山他の山は緑のデザインの対象 ・広島城は重要な要素 ・塔状建築郡 ・メモリーポイントを設け、幅広く対応

マップ同士の重ね合わせ



【図 2】
イメージマップ（以下 IM）は市民 110 人によるもの



【図 3】
整備方針図としたのは 1971 年に作成された景観マスターデザイン（以下 MD）

次に、要素毎に比較考察し、その後、総括する。

- Paths
山陽本線、国道 2 号線ではよく合致。本通沿い商店街通り、平和大通は MD に言及無し。
- Edges
川 6 本は十分に認識され、MD ともよく合致。一方で、京橋川下流では「IM が歪み、距離が歪んで小さく認識されている。これは親しみにくい、汚れたイメージが起因」²している。
- Districts
平和公園でよく合致するが商店街、基町アパート

² 『風景学入門』での中村良夫氏の言葉を引用。

への市民イメージが高い。逆に、MDに力を入れて描かれている中央公園、比治山、黄金山周辺の緑地に対しては、市民意識が低い。

- Nodes

駅は整備対象とされ、意識も高い。IMで目立つのは、県庁そばの紙屋町の node で、これは大きな商店街との交差という立地によるものと思われる。IMの方の広島空港、広島港は興味深い。

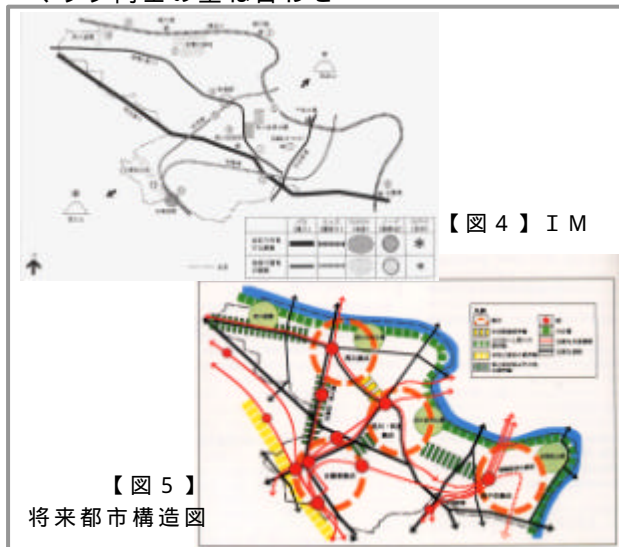
- Landmarks

意図的にMDに盛り込まれた塔状建築群への意識が低い。際立った landmark は比治山のみ。その他商業建築物へ意識が目立つ。比治山、黄金山の有名な山はMDにも描かれる。MDのメモリーポイントが市民意識 Landmarks からずれている。MDは各要素の抽出のほか、メモリーポイントやヴィスタアイストップについても豊富に描かれており、景観的に非常に充実したものと言える。MDの対象に自然要素が多く、また景観整備にも、緑、水の充実という意識が盛り込まれている。景観への意識の高さも伺える。

全体的にMDが、住民のイメージを良く反映している。このことには、1971年という早期に景観MDを作成していたことから伺えるように、市が潜在的に持っていた“景観への強い意識”ということが大きい。

荒川区

マップ同士の重ね合わせ



IMは景観基礎調査（後述）の成果物で、区民への（選択式）アンケート調査をまとめたものである。将来都市構造図（以下都構図）は都市マスタープラン（以下都市マス）に記載されているもので、整備方針図に代える。（整備全体像にあたるものは無かった）まず、マップごとに見ていく。

イメージマップ	将来都市構造図
Paths ・東西方向の明治通り、都電は強いが、南北方向が弱い ・特に都電が特徴的	・南北方向道路は網羅 ・地下鉄、JRも網羅 ・都電への整備意識は高い（延伸案もある） ・Pathsは都市軸

Edges ・隅田川はやはり強い ・京成、常磐線の地上路線も含まれている	・隅田川は都市軸という位置付け
Districts ・跡地、自然公園強い ・荒川遊園、日暮里台地は荒川区特有	・公園整備の意識強い ・白鬚西地区も整備対象 ・日暮里台地は都市軸
Nodes ・町屋駅、日暮里駅のみで交差点が無い	・駅は都電を含め、ほぼ網羅、交差点は無し ・都電熊野前駅中心の尾久拠点は特徴的 ・拠点(整備)繋ぎ都市軸
Landmarks ・隅田川の橋は強い ・特に富士山、筑波山 ・区役所も強い	・あまり考慮されていない（拠点や駅、公園整備という対応）

これらの比較から以下のことが考察できる。IMの方の要素が、実際より少ない印象。整備方針（にあたるもの）の方が多くは珍しい。主要 Path と Edge の隅田川は、よく一致。日暮里台地は、荒川区特有の特徴で合致。一方で、白鬚西公園附近の汐入地区で矛盾。整備は各拠点を中心に、という意識が強い。IM、都構図ともに Nodes は抜け落ち、交差点が描かれていない。（IMは主要駅も）Landmark として区外の富士山、筑波山が強いのは特徴的。区域外なので難しいが、富士山や筑波山の眺望などは整備方針に反映されるべき。総合すると、ある程度合致し、区の捉え方に共通した意識も見える。一方でIMの南千住地区、都構図の Landmarks のような欠落や矛盾も読み取れる。要因は、IM作成過程（手法）、区の個性や Landmarks の（公的な）取り扱いの難しさ、が推測できる。

ところで、荒川区の事例で、注目すべき3点がある。

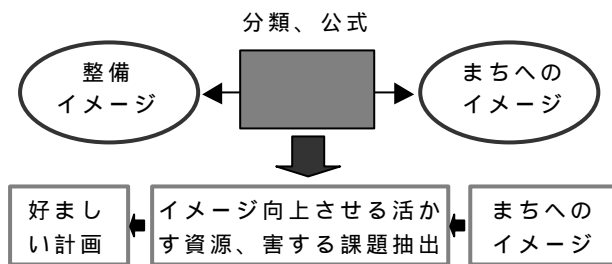
- ・景観要素数の違い
- ・白鬚西地区における矛盾
- ・富士山、筑波山の Landmarks

は、区域外要素の計画への反映の難しさとして上述した。考慮すべきは と であり、ここで、

・マップと方針図を重ねることが問題なのか？
 ・イメージマップに問題があるのか？

という2つの課題が浮び上がってくる。

は「整備方針はイメージだけで決まらない、ではイメージはどれくらい反映するか」、は「イメージマップはどれくらい有効か」の疑問にそれぞれ帰着される。ここにおいて、興味は次頁のように展開する。そしてここから、まち利用者が（まちに）抱くイメージをまちづくりに（どのように）反映させることができるのか、その際、イメージマップはどれほどの利用価値と（まちづくりへの）可能性を内包しているかということの探求が本研究の主題となってくる。



まずは、の課題を受け、実際の自治体による取り組みを見ていく。

自治体による取り組み〈荒川区〉

荒川区の取り組みは時期的に早く、平成7年の景観基礎調査（コンサルに依頼）から平成9年、区の都市マス作成までが、3年計画で進められていった。

【表1】荒川区の取り組みの流れ

<p>景観基礎調査を基にイメージマップ作成</p> <p>1</p> <p>イメージマップを基に景観基本計画策定</p> <p>調査内容や結果は、都市マスにも反映していくはずだったが、2年で活動を打ち切られる</p> <p>...</p> <p>2</p> <p>都市マスでは将来都市構造図として考慮されるに留まった（各地区では地域別構想として考慮）</p> <p>1 選択式アンケート方式を採っており、手法の点で、本来の手順は踏んでいない。</p> <p>2 イメージから整備方針（計画）という流れはここでストップすることになる。</p>

区の方も、もともとは住民イメージの計画への反映に積極的だったが、時代の流れや予算の制約に圧され、中座した。都市マスの中では、全体像として、将来都市構造図が提示され、地域別に（景観的な）詳細な整備の方針が扱われている。

自治体による取り組み〈川越市〉

都市計画法改正に伴い、平成12年の都市マス完成に至るまで住民意思の反映を第一に、取り組んだ。実際は、住民参加のワークショップ、タウンウォッチング、協議会（数百回の話し合い）と進められた。

【表2】川越市の取り組みの流れ

<p>地図上まち歩きを行い、地域像（イメージ）確認</p> <p>タウンウォッチングの後、まちの資源、問題点抽出</p> <p>...</p> <p>1</p> <p>まちのプランや将来像を提案、ほぼそのままの形で都市マスに掲載される</p> <p>1 この段階で既存計画とのすり合せが行われた。但し、自治体からの影響はこの段階でのみ。</p>
--

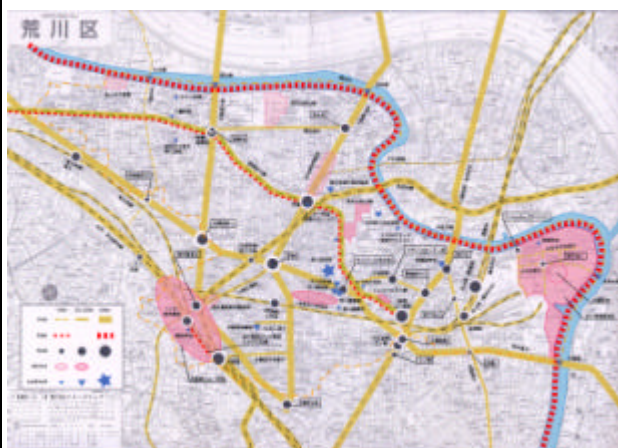
川越市はイメージに対して積極的で、他にも音風景、

香り風景イメージマップも作成している。やはりまちを代表するもの（蔵づくりのまち並み）があると、このような動きも誘発されやすい。また完成した都市マスは住民意見やイメージを良く反映したものとなっている。この川越の例を見る限り、住民（やまち利用者）のイメージを計画に反映することは可能、と言えるだろう。

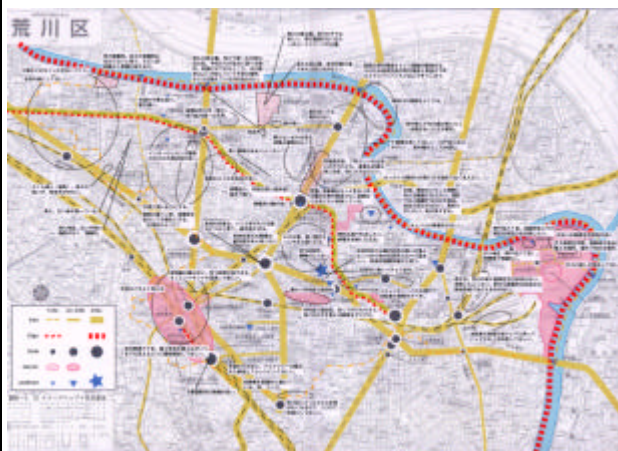
東京都荒川区を対象に行った調査

次に、前出の課題を踏まえ、イメージマップの有効性、問題点を調査するために、実際にイメージマップの作成を試みた。調査対象は、荒川区まちづくりフォーラム（9名）+学生（2名）の計11名とし、そのアンケート内容は以下の3点に集約される。

- 一、荒川区全体（骨格）を描く
 - 二、区内のトリップについて詳細に描く
 - 三、まちの問題点や将来像など、意見を記述する
- そして、以上のアンケート結果をまとめ、荒川区のイメージマップ（【図6】）を作成した。また、同時に【図6】に設問三の結果も記載したイメージマップ+まちへの意見（【図7】）も作成している。



【図6】荒川区のイメージマップ³



【図7】イメージマップ+まちへの意見

完成したイメージマップ（以下本IM）を用い、各種比較分析を行うことで、課題に取り組んでいく。

³ 富士山への言及は多かったが、区外ということで割愛した。

アンケート手法とマップ（同土）の比較

本IMとの比較を行う。手法の比較は、川越市の取り組みと荒川区の景観基礎調査を、マップ同士の比較は景観基礎調査のものを、それぞれ比較対象とする。（マップ同士の比較には【図4】と【図6】も参照されたい）
【表3】手法とマップの比較

	本研究	川越市
手法	一度描く段階を踏むことで、（地域に対し）共通基盤ができ、議論も発展し易い。また出てくる意見のレベルも揃う。新たな住民参加の Tool となりうる。	住民が多く参加できる。ただ意見のレベルはバラバラになりがち。都市マスに対する、自分達で作った感が高く、納得できない部分も発展的な議論になり易い。
	イメージの反映と要素の抽出に優れている。一方で、対象数の増加に伴う労力の増加は極めて大きい。資源の再発見や新発見からのまちづくりに適す。	労力、作業効率の点で優れている。対象数増加に対応できる。ただし、イメージは拾い切れていない。計画の再確認、根拠付け、裏付けなどに適している。
マップ	要素が多く、焦点がぼやける。 現在のまちイメージのみ反映（富士山はアンケート中の意見として） 隅田川、鉄道他地下鉄、南北方向の道路も骨格構造として挙がる	要素が少なく、焦点がわかりやすい 歴史的要素も考慮されることで、区らしさの啓発、再確認の役割も担っている 富士山、筑波山の区外の要素も挙がる 隅田川、都電の軸は調査主体からの意見

次に、イメージマップの可能性と限界について、整備方針図（とその策定過程）との比較、考察を行う。対象は、将来都市構造図（都市マスより）と景観形成の基本方針図（景観基礎調査の成果物）とする。

イメージマップの可能性と限界



【図8】将来都市構造図との比較

都構図（都市マス）との比較、考察から

- 1) 日暮里台地、隅田川の合致 / 感覚として納得できる将来像の再確認としてイメージマップが有効
- 2) (本IMには見られない) 尾久拠点 / 現在イメージを表すイメージマップは将来イメージにはなりにくい
- 3) 宮地周辺 (【図7】で意識が最も集中) / 都構図への段階で抜け落ちた要素に再び焦点をあて、再評価
- 4) IMの Nodes、Districts と都構図の拠点整備 / 成熟した場所の Modify と、これから成熟させる (開発) 拠点の性格分けが可能
- 5) 商店街 (都構図には無いが都市マスの地域別方針にある) / 規模の大小で抜け落ちる要素も拾い、根拠づけられる
- 6) 都市マスにある非常に種類の多い整備計画 / 概して縦割りの様々な計画やプランを統括するような (共通の) 基盤となり得る



【図9】基本方針図との比較

景観形成の基本方針図（景観基礎調査）との比較、考察から

（この基本方針は、景観基礎調査によってできたイメージマップを基に、区の景観形成の方針として提案されたものである）

-) 基本方針図は前段階のIM【図4】から要素が格段に増えた / 整備を前提に描かれているので計画用に要素が盛り込まれた
-) 白鬚西地区の記述に矛盾 (IM【図4】には無いが基本方針図では記述 / 区の方でもともと持っていた白鬚地区再開発計画を、方針図の段階で組み込まれている)
-) 景観形成基本方針が多少わかりにくい (プライオリティーの欠如) / 方針のプライオリティー付けにもイメージマップが役立つ (イメージの強いところに重点)
-) イメージ要素が抜け落ちる重要性 / イメージが悪いから弱いということも十分に考えられる (今回に関しては無かったと思う)

結論と課題

本研究は、まちに対する、計画者のイメージとまち利用者のイメージ間に存在する Black Box の解明を契機とし、そこからイメージのまちづくりへの反映ということに焦点を絞っていった。また、イメージを映し出す媒体としてのイメージマップの持つ可能性と限界について分析、考察を試みた。結論は、以下の3点に集約される。

イメージを反映させたまちづくり

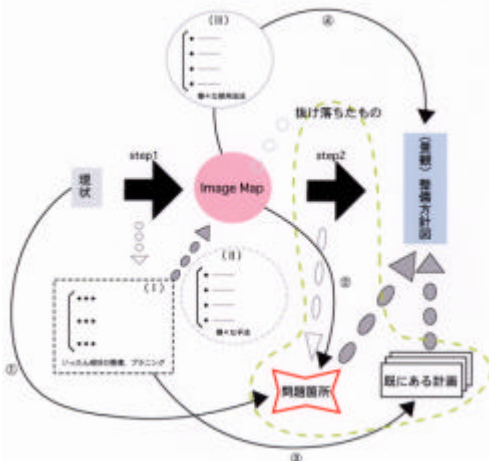
取り上げた2例を見る限り、住民のイメージを反映させた計画づくりは可能であると言える。特に川越市のように、名所や資源を持つまちにおいて、このような動きは誘発されやすい。加えて継続的な住民への啓発、住民側から起こる自主的、積極的な活動の相乗効果が、その推進にとって大きな力となっている。一方、別の要因（時代の流れ、予算等）が絡んでくることで、可能不可能という議論以前に、取り組み自体が打ち切られるケースもある。この場合、むしろこれらが、その実現可能性を大きく左右することになる。また、もうひとつの論点として「すり合わせによるズレ」がある。実際、住民から出る意見やイメージは、そのまま（計画として）採用される以前に、検討が為される。そこでは主に、既存計画とのすり合わせ作業が行われており、ここでズレが生じている。（Black Box の一部と考えられる）ただし、このズレはまちづくりの最適解を探る進歩的なものであるとも言えるだろう。

イメージマップの妥当性

実際にマップを作成するという作業に携わることでの経験則であることは否めないのだが、正当な理論、手法を用いることで、イメージを反映するイメージマップの作成は可能であると言える。ここにその妥当性を言うことができる。

イメージマップの持つ可能性と限界

本研究において分析、考察されたイメージマップの位置付けは以下の通りである。



その可能性については、次のようにまとめられる⁴。

⁴ ヒヤリング調査やアンケートも考慮されている。

各 Step（とその背景）の根拠、裏付け
< > 現状から地域の問題箇所を洗い出す際の叩き台や共通基盤

< Step1 > 自分の住む地域（まち）に対する意識の共通基盤、新たな住民参加の Tool

< > 資源再、新発見からのまちづくりや既存計画の再確認等使い分けで、状況に応じた活用

< Step2 > プラン化で抜け落ちたものの再評価
縦割りの各種整備プランの統括

またその限界については、以下のようになる。

あくまで現状（現在）のイメージを反映
そのことで、現状にそぐわない将来像を描いてしまう危険性、弊害大

イメージマップという過程を踏んだことの満足感という弊害

以上がまとめだが、ここで、本研究で考える『イメージを反映させたまちづくり』について少しだけ触れたい。

イメージからのまちづくりを考えているなら、本来、作成したイメージマップからまちづくりの方針や、整備方針を描くべきであったと思う。そして【図7】はこの土台となるべきものであるはずだった。しかし、描くという作業は少なからず描く側の恣意性が含まれてしまうものである。そこで今回はイメージとまちへの意見を1つのマップにする⁵ことに留め、できる限り、恣意性を排除しようと努めた。この観点からすれば、本研究での『イメージを反映させたまちづくり』とは、この【図7】（とその発展）にまともまっていると言える。（これらを踏まえた上で、荒川区の方針図や将来図を描くことに意義があると考えている）

最後の本研究の課題について述べる。

まず1つにこれらの議論が、限られた事例におけるものであることが挙げられる。今後の論の発展には、より多くの事例にあたっていくことが重要となる。もう1つは、やはり荒川区における『イメージを反映させたまちづくり』の方針を描くことである。描くという段階に至るまでの議論もあるであろうが、これは荒川区に住む者として、今後の自身の課題⁶となるだろう。

⁵ 今回は触れられなかったが、アメリカでは認知マップとして同様のものが作成されている。

⁶ 現在も荒川まちづくりフォーラムの方や興味を持ってくださった方々とイメージマップとその後については議論を深めている。ちなみに今回のイメージマップとまちづくりの話は荒川区内で配布されている『あらかわだいすき』にも記載される予定である。

主要参考文献

Kevin Lynch (1960) 『The Image of the City』
樋口忠彦 (1996.3) 『景観整備イメージと景観整備手法との関係についての研究』

主要資料

川越市都市計画課 (2000) 『川越市都市計画マスタープラン』
東京都荒川区 (1997.3) 『荒川区都市計画に関する基本的な方針 / 荒川区都市計画マスタープラン』
ランドブレイン (1995.3) 『荒川区景観基礎調査報告書』
荒川区都市景観基本方針検討委員会 (1996.3) 『荒川区都市景観基本方針策定調査報告書』

インタビュー先

荒川区都市計画課 ランドブレイン株式会社 川越市都市計画課、環境政策課 荒川まちづくりフォーラム（アンケート）